

わたしの戦争体験

福岡市博多区 河野 陽美

戦争の体験といってもまだ私は5才前後と余りにも幼くて、くわしいことはわからず理解もできませんでしたが、子供として大ざっぱな記憶をつづってみました。

戦争前は私達家族は浜小路（後に焼夷爆弾が落とされた所）に住んでいて、父は鉄鋼所を営み、使用人も多数いていつも長い棒を肩にかついでいた男の方達が出入りして、父はカナヅチを握り、汗を流していたのを私は見ていました。時折父は私を自転車の後に乗せて銀行へ、また毎夕食後は親子3人で、東中洲や土居町まで出かけ、『台湾ブッサン』とか『ブラジレイロ』とやらに行き、私はいつもみつ豆を食べておりました。その度にステキな服を着せられ、父の肩車に乗りはしゃいでいました。その当時あまりどこにもおいてない電話を引き、父も母も大好きな三味線を習ったり、歌舞伎見物となかなかの日々でした。それも1枚の紙を突然貼られ一変しました。強制疎開で1週間以内に退ちのきのこと。私達家族は何もかも引き払い、とりあえず井尻のおばさん宅へ、そこでは一間でおじいちゃんも入れて4人、誰かホットケーキをたくさん焼いて防空ごうへ入っていました。

まもなく五十川に引っ越しました。そこは農家の離れで、大きなおつぼで庭石があり長い廊下には雨戸がたくさんあり、廊下には父がブランコを作ってくれて、子供の私には快適な所でした。お宮の近くに防空ごうがあり、空襲警報が始ると、いち早く父が得意の肩車にて私を連れて来ておりました。中には小さい子供が多数入って、今でも特に印象に残ってるのは、甘いお乳のにおいがかすかに漂うかわいい赤ちゃんも箱に入れられておりました。その頃の食べ物は「かぼちゃ」「さつまいも」「だんご汁」、それにおじいちゃんの好物の「ネッタウリ」、これはじゃがいもを沸かしてつぶして玉ネギ等を入れるのです。そしておじいちゃんは、いつも鋸を使って「ブリキ」でお弁当箱等作ってました。ある時警報が発令され、鋸をそのままして防空ごうにかけこみ母もあわててその鋸にひっかかり、ひざを怪我し血を流しながら防空ごうへ、そういう時代でした。

さらに母と私は疎開しました所は大分県豊後中村という所で、あたりは杉の木ばかりで飛行機の音一つせず電気もなくランプを灯しという生活、ここは母が買出しに行き、知りあったのでした。子供の私はやはりここでも山を走りまわり、「くり」を拾ったり「なし」をちぎり、この家の子供と川で遊んだりと楽しい思い出の場所でした。ただおしりにできものができて痛かった。ここでは戦争中とは思えない程別世界のようだけど、時々五十川に帰る時はさすがに大変、駅にはリュックを背追った人であふれ、窓から乗り降り、床に紙を敷きすわった。浮浪者もたくさんいた。でも子供の私は知りあいの子の悦子ちゃんと歌をうたったり、特攻隊人形を作ってもらったりと車中を過ごした。

また豊後中村に行くと、いつ復員して来たのかこの家のおじさんがいました。私に「ゲタ」

を作ってくれたり、川で魚をとって串にさし焼いてくれたりしてました。もう戦争は終わったと大人の人達が話していました。まもなく父が母と私を迎えに来ました。もう戦争は終わったのだとまた、五十川に帰りました。それからかなり後になって、福岡大空襲で博多の街に焼夷爆弾が落ちたということを知りました。私達の町内で疎開しなかった人達は皆焼死されたと母が言っていました。

父と母は生活のため立ち上りました。豆腐を作ってた父は、「にがり」や「大豆」の仕入れに出かけ、ふたりで朝早くからいっしょうけんめい作ってたのを、私はそばでじっと見てました。また、母が回転焼みたいなのを焼いてまして、できあがるといづれも竹下のお店に乳母車にて運んでました。私もついて行ってました。

ある日私が門口で遊んでると、大きなリュックを背負った男の人が私に近づき、この大家さん宅の名前を確かめ、私がうなずくと中に入っていました。それがこのおじさんが復員して来た時のことでした。その後おばさんはお腹が大きくなり、まもなく赤ちゃんを生みました。その子が第一次ベビーブームの一世です。

こんなおめでたい例ばかりでなく、戦争の犠牲者は周りにもたくさんいました。赤ちゃんを生んだおばさんの妹さんは夫に戦死され、たたみに顔をうずめて泣き崩れていました。幼い子供とおばあちゃんを抱えてました。また、私の従姉妹の和子ちゃんも父親の顔はまったく知りません。和子ちゃんがお腹に入ってる時出征し、そのまま戦死してしまったのです。どちらのおばさんも若くして戦争未亡人となり、その後必死で生きてました。母もたくさんの着物はお米に変わったり、私の洋服やいろんな物になりました。

また近所のお宮に引き揚げ者がいました。後に私の大親友となる方の家族で、台湾からの引揚げ者で何でもお父様が総督府に勤めて偉い人だったそうで、お母様もいい所の出で上品な方でした。子供さんが8人もいらして住む所もなく、お宮の拝殿に幕を張り着のみ着のままでした。お風呂は私の所へ案内しておりました。皆優秀な方達ばかりで、10人入ってもお湯は汚れませんでした。母は感心しておりました。だがまもなくお父様は結核で亡くなられ、その後を追う様にお母様も同じく結核で亡くなり、私の親友は幼くして両親を亡くしました。

私の父もなかなか仕事がみつからず、近くの森永製菓の会社にたのんで工場に臨時で入れていただきました。同級生に工場長の息子さんや事務局長の娘さん等役付の子息達が多く、子供心にも肩身のせまい思いをしてました。私はもう一度あの浜小路にいた頃のように父に鉄工所を再開してもらい、自慢の腕をふるってほしいなと願っていた。でも父の仕事は安定せず、その後鉄工所に勤めたものの、人員整理にあい失対労務者、母は着物を手放しの生活、旅館の皿洗い、夫妻別居となり、ついに母は私を連れて病院へ住み込み附添婦として働きに行く等、私達家族も苦悩の日々でした。もう二度と我が家にあの日の充実した日々は訪れませんでした。これももとをただせば戦争の傷跡というのでしょうか？父は13年前78才で他界しましたが、私は父のカナヅチをたたく勇姿を最後まで見つづけたかった。